

すべてが朱色に染められた
銅山とベンガラベングラの町

「吹屋」



温もりを感じる天然のベンガラの朱色



ベンガラ色の瓦が美しい吹屋の町並み



- ≪≪ 写真右から
- ゆるやかな時の流れを感じるたたずまい
 - 屋根も壁もすべてがベンガラ色
 - 吉岡銅山の名残りをとどめる
笹畝(ささうね)坑道

「ベンガラ」を「存じだろるか?」それは、独特の朱色が鮮やかな日本の伝統的な顔料。人類が使用した最古の顔料ともいわれている。「ベンガル?」と勘違いされた方もあながち間違ではない。そもそもベンガラは、奈良時代にベンガル(インド)から渡ってきたことで、そう呼ばれているからだ。このベンガラ色に、集落一体が染め抜かれた町がある。それが、岡山県高梁市成羽町吹屋。

そもそも吹屋は、銅で栄えた町である。「吉岡(吹屋)銅山」の歴史は古く、発見されたのは大同二年(八〇七年)。中国地方第一の銅山として、江戸時代から明治にかけて日本の近代化を支えてきた。明治以後は、三菱金属(株)の経営となり、日本初の洋式溶鉱炉を造り、日本三大鉱山として発展していく。この銅山の捨て石であった鉄鉱石から天然ローハができ、それが元で偶然ベンガラが発見されたのが江戸時代だそう。以来、町では次々とベンガラ工場が誕生し、ベンガラは吹屋の特産物となった。その品質の素晴らしさから、吹屋は国内唯一のベンガラ生産地と賞賛され、陶器、漆器、建造物、船舶などの塗料として幅広く愛用されてきた。

この銅とベンガラにより財を成した当時の吹屋の長者たちが、宮大工の棟梁たちを招き入れ、町並みを一斉にベンガラ一色に染め抜いたのである。統一したコンセプトで町づくりを考える、当時としてはまさに斬新・先進

的な発想だ。そのお陰で、現在、吹屋は重要な伝統的建造物群保存地区に選定されている。町を歩いていると不思議な感慨に包まれてくる。この町には、初めて見た者にも、なぜか郷愁を感じさせるたたずまいがある。銅の輝きにも似たベンガラの朱。それは、日本人の心の奥底に残る故郷を彩る、懐かしい色のひとつなのかも知れない。

吹屋で出会った「私とベンガラ」

田村 教之氏

田邊 典子氏

かつてベンガラ製造のプロだった田村氏は、いまもベンガラと吹屋をこよなく愛し続けている。「代々ベンガラを作り続けていたの、その良さをよく知っています。ですから、町おこしにベンガラは最適だと考えました。吹屋のベンガラは、地元産のローハをもとに生産設備は土、石臼、木などすべて自然のもの。水は天然水で作りに上げています。だから手づくりの味があります。鮮明度の高さも、魅力のひとつです。」

「私とベンガラ」

そもそも吹屋の側で生まれ育ち、子供の頃からベンガラに親しんできた田邊氏。現在、吹屋ふるさと村陶芸館の陶芸家として活躍されている。「ベンガラを持つ日本的な美しさに魅かれ、使ったのが始まりです。ベンガラは、作家の意志によって、作家の色を出せる顔料だと思えます。今後も積極的にベンガラを使い続けていきたいと考えています。」

